

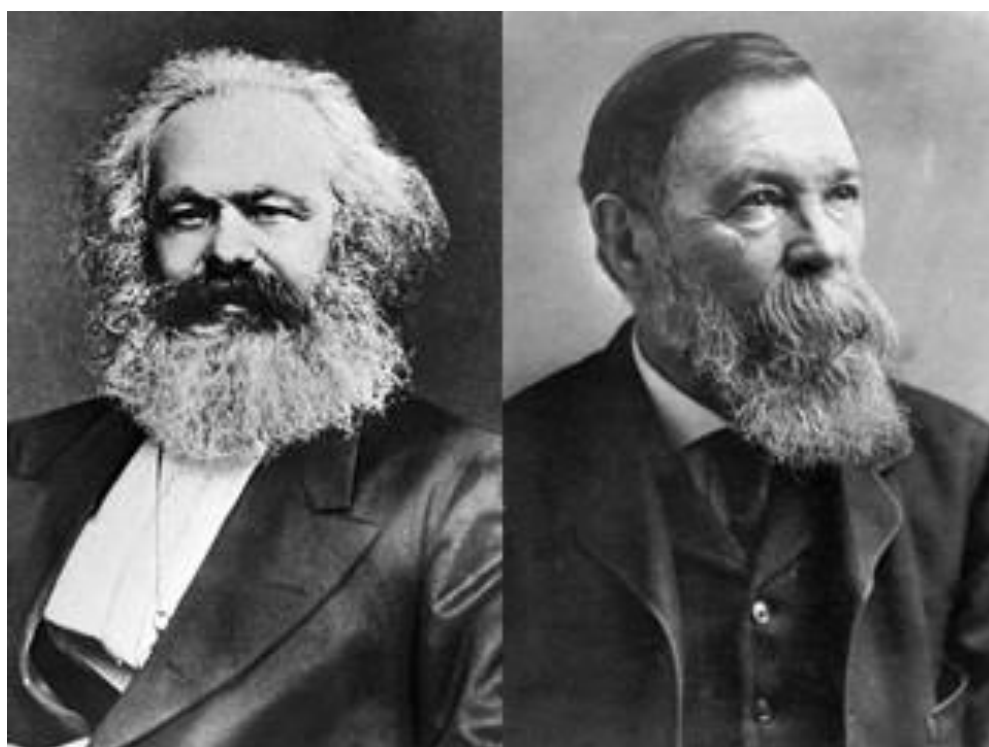
千葉県学習協会『資本論』講座

講師：宮崎礼二（明海大学経済学部 准教授）

新版『資本論』第二巻講座

2023年10月15日

第一巻ダイジェスト講座 2 / 3



新日本出版社新版ページ番号は【 】

（ ）内の番号はヴォルケ版『資本論』原書のページ番号を付記

第一部 資本の生産過程

第一篇 商品と貨幣

第三章 貨幣または商品流通

貨幣の成立によって、商品世界は商品と貨幣とに分化する。貨幣は、一般的等価物として、価値の現象形態となる。

その貨幣のいろいろな機能：

「価値の尺度」：商品の価値のモノサシとしての機能。→ 第一節

「流通手段」：商品交換の仲立ちという役目。市場での実際の活動。→ 第二節

「貨幣」：一時的に流通から乖離して、独立の立場を占める。「貨幣蓄蔵」「支払手段」

「世界貨幣」の機能を果たす。→ 第三節

第一節 価値の尺度

■ 貨幣商品としての金

「私は、本書のどこでも、ことを簡単にするために、金を貨幣商品として前提する。」

【① p. 167】(p. 109)

- 「金の第一の機能は、商品世界にその価値表現の材料を提供すること、すなわち、諸商品価値を、質的に等しく量的に比較可能な同名の大きさとして表わすことにある。こうして金は、価値の一般的尺度として機能し、そして独自の等価物商品である金は、もっぱらこの機能によってはじめて、貨幣となる。」

【① p. 167】(p. 109)

■ 外在的な尺度としての金

「諸商品は、貨幣によって同単位での計算が可能となるのではない。逆である。すべての商品が価値としては対象化された人間的労働であり、したがってそれ自体が同単位で計算可能であるからこそ、すべての商品はその価値を同じ独自な一商品で共同ではかり、そうすることによって、この独自な一商品を諸商品の共同の価値尺度または貨幣に転化することができるのである。価値尺度としての貨幣は、諸商品の内在的価値尺度である労働時間の必然的現象形態である。」

【① p. 167】(p. 109)

⇒ 商品は、すべて価値として量的に比較可能なものであるからこそ、金が、そのことを外面的に現象させて、価値尺度になることができる。

⇒ 金は、その「内在的価値尺度」の現象形態としての、外在的尺度である。

■ 表象された観念的貨幣

「商品の価格または貨幣形態は、商品の価値形態一般と同じように、手でつかめるその実在的な物体形態から区別された、したがって単に観念的な、または表象されただけの形態である。鉄、リンネル、小麦などの価値は、目には見えないけれども、これらの物そのもののうちに存在する。これらの価値は、それらの物の金との同等性によって、それらの物

のいわば頭の中にだけ現われる金との関連によって、表象される。」【① p. 169】(p. 110)

⇒ 「価値尺度という機能においては、貨幣は、ただ表象されただけの、または観念的な貨幣として役立つ」 【① pp. 169-170】(p. 111)

■ 度量基準

「諸商品価値を、その度量単位としてのある固定された分量の金に関連づける必要が技術的に生じてくる。この度量単位そのものは、さらに可除部分に分割されることによって度量基準に発展させられる。……(略)……だから、すべての金属流通では、重量の度量基準の既存の呼称がまた貨幣の度量基準または価格の度量基準の最初の呼称になる。」 【① p. 173】(p. 112)

■ 「こうした歴史的過程は、金属重量での貨幣名とその慣習的重量名との分離を世の習わしにする。貨幣の度量基準は、一方では純粋に慣習的であり、他方では一般妥当性を要求するので、最終的には法律によって規制される。」 【① p. 177】(p. 115)

「……いまや、諸価格、すなわち諸商品の諸価値が観念的に転嫁されている金分量は、貨幣名、または金の度量基準の法律的に有効な計算名で表現される。したがって、一クォーターの小麦は一オンスの金に等しいと言う代わりに、イギリスでは、それは三ポンド一七シリング一〇 $\frac{1}{2}$ ペンスに等しいと言うであろう。こうして、諸商品は、それらがどれだけに値するかを、それらの貨幣名で語り、貨幣は、ある物を価値として、したがって、貨幣形態で、固定する必要があるときにはいつでも、計算貨幣として役立つのである。」 【① pp. 177-178】(p. 115)

1 クォーターの小麦 = 1 オンスの金 (1/16 重量ポンド = 28g)

⇒ 1 クォーターの小麦 = 3 ポンド 17 シリング 10 $\frac{1}{2}$ ペンス

《参考》

重量 : 1 オンス = 約 0.625 重量ポンド = 約 1/16 重量ポンド (=28g)

1 重量ポンド = 16 オンス

貨幣 : 1 ポンド = 20 シリング

1 シリング = 12 ペンス

1 ポンド = 240 ペンス

第二節 流通手段

a 商品の変態

■ 商品の姿態変換

「交換過程が、諸商品を、それらが非使用価値である人の手から、それらが使用価値である人の手に移行させる限りにおいて、それは社会的素材変換である。ある有用な労働様式の生産物が他の有用な労働様式の生産物に取って代わる。商品は、それが使用価値として役立つ場所にひとたび到達すると、商品交換の部面から脱落して消費の部面にはいる。ここでわれわれが関心をもつのは、前者だけである。したがって、われわれは、全過程を形

態の面から、すなわち社会的素材変換を媒介する諸商品の形態変換または変態だけを、考察しなければならない。」

【① p. 185】 (p.119)

■ 販売と購買

「……商品の交換過程は、次のような形態変換において行われる。」

【① p. 187】 (p. 120)

W (商品) — G (貨幣) — W (商品)

「この運動は、その素材的内容からすれば、W — W、すなわち商品と商品との交換であり、社会的労働の素材変換」

【① pp. 187-188】 (p. 120)

○ 商品の第一の変態または販売：W — G

「商品価値が商品のからだから金のかからに飛び移ることは、私が別のところで名づけたように、商品の“命がけの飛躍”である。」

【① p. 188】 (p. 120)

⇒ 商品は販売されることによって、その価値を実現。商品生産に支出された労働が社会的労働であることというこの実証。

⇒ 販売できなければ、商品に含まれる労働は意味を失う。

W — Gの実現＝貨幣所有者の意志に依存

「商品は貨幣を恋い慕うが、“まことの恋が平穩無事に進んだためしはない”」

【① p. 190】 (p. 122)

⇒ 「諸人格相互の独立性は全面的な物的依存の体制によって補完されている」

【① P. 191】 (p, 122)

○ 商品の第二の変態または購買：G — W

「貨幣は、他の全ての商品の脱皮した変態であり、言い換えれば、それらの一般的譲渡の産物であるから、絶対的に譲渡されうる商品である。……(略)……貨幣は、一方では売られた商品を代表するのであり、他方では買われうる諸商品を代表する。」

【① pp. 194-195】 (p. 124)

⇒ G — W：同時に販売 W — G

「一つの商品の最後の変態は、同時に別の商品の最初の変態である。」

【① p. 195】 (p. 124)

○ 商品流通

「一つの商品の総変態は、そのもっとも簡単な形態においては、四つの極と三人の“登場人物”とを想定する。」

【① p. 196】 (p. 125)

四つの極：W₁ — G、G — W₂

三人： 商品W₁所有者 — 貨幣所有者 → W₁所有者が貨幣所有者になる
(売り手) (買い手) (買い手)

|

商品W₂所有者
(売り手)

「こうして、各商品の変態系列が描く循環は、他の諸商品の諸循環と解けがたくからみ合っている。この総過程は、商品流通として現われる。」

【① pp. 197-198】 (p. 126)

■ 商品流通の媒介者としての貨幣

「貨幣は、それが一つの商品の変態系列から最終的に脱落するからといって、消滅するものではない。貨幣は、商品が立ちのいた流通上の場所につねに沈殿する。」

【① p. 199】 (p. 127)

■ 流過程の中断：恐慌の可能性

「どの販売も購買であり、またどの購買も販売であるから、商品流通は諸販売と諸購買との必然的均衡をもたらすというドグマほど、ばかげたものはありえない。」

【① p. 199】 (p. 127)

⇒「だれも、自分自身がすでに売ったからといって、ただちに買う必要はない。」

【① p. 200】 (p. 127)

b 貨幣の通流

■ 貨幣の通流

「……商品流通によって貨幣に直接与えられる運動形態は、貨幣が絶えずその出発点から遠ざかること、ある商品所有者の手から別の商品所有者の手に移っていくこと、すなわち貨幣の通流である。」

【① p. 202】 (p. 129)

■ 購買手段としての機能

「貨幣の通流は、同じ過程の不断の単調な反復を示す。商品はずねに売り手の側にあり、貨幣はずねに購買手段として買い手の側にある。貨幣は、商品の価格を実現することによって、購買手段として機能する。」

【① pp. 202-203】 (p. 129)

■ 流過程に必要な貨幣量

「……この前提（金の価値は与えられたものとする）のもとでは、流通手段の総量は、諸商品の実現されるべき価格総額によって規定されている。さらに、いま、どの商品種類の価格も与えられたものと前提すれば、諸商品の価格総額は、明らかに、流通に出回っている商品総量によって決まる。」

【① pp. 207-208】 (p. 132)

○ 空間的に併存せず、時間的に継起する場合

諸商品の価格総額 / 同名の貨幣片の通流回数 = 流通手段として機能する貨幣総量

【① p. 209】 (p. 133)

○ 「流通手段の量は、流通する商品の価格総額と貨幣通流の平均速度とによって規定されるという法則は、諸商品の価値総額が与えられていて、それらの変態の平均速度が与えられていれば、通流する貨幣または貨幣材料の量はそれ自身の価値によ

って決まる」

【① p. 214】 (pp. 136-137)

⇒ 貨幣の通流速度を所与とすれば、商品総額が流通必要貨幣量を決定

= 左辺が右辺を規定



「商品価格は流通手段の総量によって規定され、その流通手段の総量はまた一国に存在する貨幣材料の総量によって規定される」

【① p. 214】 (p. 137)

= 右辺が左辺を規定 ⇒ 貨幣数量説

c 鑄貨。価値章標

■ 鑄貨の摩滅

「……造幣局から出ていく道は、同時に坩堝への歩みでもある。すなわち、通流しているうちに、金鑄貨は、あるものはより多く、あるものはより少なく、摩滅する。金の肩書と金の中身とが、名目純分と実質純分とが、その分離過程を歩み始める。同名の金鑄貨でも、重量が異なるために、価値が等しくなくなる。流通手段としての金は、価値の度量基準としての金から背離し、またそれとともに、諸商品 一金がこれらの商品の価値を実現するのであるが— の現実的等価物であることをやめる。この混乱の歴史が、中世および一八世紀までの近代の鑄貨史をなしている。鑄貨の金存在を金仮象に転化させる。」

【① p. 218】 (p. 138)

⇒ 「金属貨幣を他の材料からなる標章または象徴で置き換える可能性を、貨幣通流は潜在的に含んでいる。」

【① p. 219】 (p.140)

■ 価値章標の代替化

○ 紙券

「……それらの鑄貨機能は、それらの重量とは、すなわちおよそ価値とは、事実上まったくかわりのないものとなる。金の鑄貨定在は、その価値実体から完全に分離する。こうして、相対的に無価値な物、すなわち紙券が、金の代わりに鑄貨として機能することができるようになる。」

【① p. 221】 (pp. 140-141)

⇒ 「一ポンド、五ポンドなどといった貨幣名が印刷された紙券が、国家によって外部から流通過程に投げ込まれる。それらが現実には同名の金総額に代わって流通する限り、それらの運動には貨幣通流そのものの法則だけが反映する。」

= 「この法則とは、要するに、紙幣の発行は、紙幣によって象徴的に表わされる金（または銀）が現実には流通したはずの量に制限されなければならない」

【① p. 222】 (p. 141)

○ インフレーション

「もし紙券の総量が、たとえば、一オンスずつの金の代わりに二オンスずつの金を表わすとすれば、たとえば一ポンドは、事実として約 1 / 4 オンスの金の代わりに約 1 / 8

オンスの金の貨幣名になる。結果は、金が価格の尺度というその機能の点で変更をこうむったのと同じである。こうして、以前は一ポンドという価格で表現された同じ価値が、いまでは二ポンドという価格によって表現されたのである。」【① p. 223】(p. 142)

第三節 貨幣

a 蓄蔵貨幣の形成

■ 蓄蔵貨幣の形成

「二つの相対立する商品変態の連続的循環または販売と購買との流動的転換は、貨幣の休むことのない通流に、または流通の“永久運動機関”としての貨幣の機能に、現われる。変態系列が中断され、販売がそれに続く購買によって補われなくなるやいなや、貨幣は不動化される。」【① pp. 236-237】(p. 144)

⇒ 「商品を買うためにではなく、商品形態を貨幣形態に置き換えるために、商品が売られる。この形態変換は、素材変換の単なる媒介から自己目的になる。」

＝ 「貨幣は蓄蔵貨幣に石化し、商品販売者は貨幣蓄蔵者になる。」

【① p. 227】(p. 144)

■ 貨幣蓄蔵の衝動

○ 運転資金

「商品生産がいつそう発展するにつれて、どの商品生産者も、“万物の神経”である『社会的動産担保』を確保しなければならなくなる。彼の欲求は絶えず更新され、他人の商品を絶えず買うことを命じるが、他面では彼自身の商品の生産と販売は時間を要し、また偶然に左右される。売ることなしに、買うためには、彼は、あらかじめ、買うことなしに売っていなければならない。」【① p. 228】(p. 145)

○ 黄金欲

「……あらゆるものが、商品であろうとなかろうと、貨幣に転化する。すべてのものが売れるものとなり、買えるものとなる。」

「貨幣においては諸商品のあらゆる質的区別が消え去っているように、貨幣は貨幣でまた、徹底的な水平派として、あらゆる区別を消し去る。しかし、貨幣はそれ自身商品であり、だれの私有財産にもなるうる外的な物である。こうして、社会的な力は私人の私的な力となる。」【① p. 229】(pp. 145-146)

■ 貨幣蓄蔵の機能：流通貨幣量の調節メカニズム

「蓄蔵貨幣の形成は、金属流通の経済では、さまざまな機能を果たす。もっとも身近な機能は、金銀貨幣の通流諸条件から生じる。すでに見たように、商品流通の規模、価格、および速後が絶えず変動するのにつれて、貨幣の通流総量は、休むことなく干満を繰り返す。したがって、貨幣の通流総量は、縮小や拡大が可能でなければならない。」

⇒ 「蓄蔵貨幣の貯水池は、同時に流通している貨幣の流出および流入の水路として役立」つ

【① p. 234】(p. 148)

b 支払手段

■ 商品の譲渡と支払の時差：信用売りの発展

「商品流通の発展とともに、それによって商品の譲渡がその商品の価格の実現から時間的に分離される諸関係が発展する。」 【① p. 235】 (p. 149)

⇒ 商品生産に必要な時間の長短、農産物のような生産の季節性、販売市場への距離など

通常の商品売買：貨幣は商品と交換

→ 債権者と債務者 = 支払手段としての貨幣

■ 決済業務の発達

「諸支払いが同じ場所に集中するにつれて、諸支払いの決済のための固有の施設と方法とが自然発生的に発達する。たとえば中世のリヨンにおける“振替”がそうである。」

【① pp. 239-240】 (p. 151)

■ 貨幣総量の節約・効率化

「……債務の差額だけが精算されればよい。諸支払いが大量に集中すればするほど、それだけその差額は、したがって流通する支払手段の総量もまた、相対的に小さくなる。」

【① p. 240】 (p. 151)

■ 貨幣恐慌の可能性

「貨幣恐慌が起きるのは、諸支払いの過程的な連鎖と諸支払いの人為的制度とが十分に発達している場合だけである。この機構の比較的全般的な攪乱が起されれば、それがどこから生じようとも、貨幣は、突然かつ媒介なしに、計算貨幣というただ観念的なだけの姿態から硬い貨幣に急変する。」 【① p 240】 (p. 152)

c 世界貨幣

■ 世界市場と貨幣

「貨幣は、国内の流通部面から外へ歩み出るとともに、価格の度量基準、鑄貨、補助鑄貨、および価値章標という、国内の流通部面で成長する局地的諸形態をふたたび脱ぎ捨て、貴金属のもともとの地金形態に逆もどりする。世界商業では、諸商品はそれらの価値を普遍的に展開する。だから、そこではまた、諸商品の自立的な価値姿態は世界貨幣として諸商品と相対する。」 【① pp. 247-248】 (p. 156)

⇒ 万国共通の形態＝地金形態（金・銀）による支配

第二分冊の全体像

第一分冊：資本主義的生産様式の土台をなす市場経済の解明のための商品論・貨幣論

→ 商品世界が貨幣を生み出し、商品流通が展開される経済。だが、資本はまだ登場しない

第二分冊：貨幣が資本に転化、商品世界の必然的な産物として資本が生み出される

→ 資本の研究

★ 剰余価値がどこから生まれてくるのか（第二篇）

★ どのような方法でその拡大が追求されるのか（第三篇～第六篇（第3分冊））

★ 拡大した資本の蓄積がどのように進行するのか（第七篇（第4分冊））

⇒ ① 資本とは何か、② 商品としての労働力が資本の価値増殖の秘密を握っていること、③ 価値増殖がどのように実現するのか、について解明し、なぜ資本家は労働時間を延長するのかを明らかにする。

第二篇 貨幣の資本への転化

第四章 貨幣の資本への転化

第一節 資本の一般的定式

■ 資本主義における 16 世紀の意義

○ 「商品流通は資本の出発点である。商品生産、および発達した商品流通 —— 商業 —— は、資本が成立する歴史的諸前提をなす。世界商業および世界市場は、一六世紀に資本の近代的生活史を開く。」 【② p. 255】(p. 161)

● 商品 = 資本主義生産様式の基礎をなす単位

● 商品流通から資本の成立への転機は 16 世紀

● <大航海時代>の開始

・ ヨーロッパ文明の世界とのはじめての接触

・ 「世界商業」「世界市場」の成立

・ スペイン・ポルトガルからオランダ・イギリスへの覇権交代

・ 資本主義的生産様式の初歩 = マニファクチュア時代：16 世紀に始まる

→ 資本主義の始まり

→ 地理上の発見による商人資本の急速な発展 = 封建制の打破

■ W-G-W

○ 「商品流通の直接的形態は、W-G-W、商品の貨幣への転化および貨幣の商品への再転化、買うために売る、である。」 【② p. 256】(p. 162)

● G-W で入手した商品を、使用価値として消費

= 生産者にとっての非使用価値の使用価値への転化

■ G-W-G

- 「…それとは独特に区別される第二の形態 G-W-G、貨幣の商品への転化および商品の貨幣への再転化、売るために買う、を見いだす。このあとのほうの流通を描いて運動する貨幣が、資本に転化し、資本に生成するのであって、その性質規定から見てすでに資本である。」 【② p. 256】(p. 162)

● 2つの対立する局面

- ・ G-W: 「購買では、貨幣が商品に転化される」 【② p. 257】 (p. 162)

- ・ W-G: 「販売では、商品が貨幣に再転化される」 【② p. 257】 (p. 162)

→ G-G: 「貨幣と貨幣との交換」 【② p. 257】 (p. 162)

- 「…たとえば 100 ポンド・スターリングを 100 ポンド・スターリングと交換しようとするのであれば、流通過程 G-W-G はばかげた無内容なものであろう。」

【② p. 251】 (p. 162)

○ G-W-G'

● $G' = G + \Delta G$

→ 「この増加分、または最初の価値を超える超過分を、私は剰余価値 (surplus value) と名づける。このように、最初に前貸しされた価値は、流通のなかで自己を維持するだけでなく、流通のなかでその価値の大きさを変え、ある剰余価値をつけ加える。すなわち自己を増殖する。そして、この運動が、前貸しされた価値を資本に転化させるのである。」

【② p. 262】 (p. 165)

◎ 前貸しされた貨幣: ある物を再び売るために買う場合

◎ 支出: 売るためにではなく、買う場合 【② p. 259】 (p. 163)

■ 剰余価値の命題

- 「循環 W-G-W は、ある一つの商品の極から出発して別の商品で終結するのであって、このあとの商品は流通から出て消費にゆだねられる。それゆえ、消費、欲求の充足、一言で言えば使用価値が、この循環の究極目的である。これに反して、循環 G-W-G は、貨幣の極から出発して、最後に同じ極に帰ってくる。だから、この循環を推進する動機とそれを規定する目的とは、交換価値そのものである。」

【② p. 261】 (p. 164)

→ 資本の循環の推進的動機と規定的目的 = 「交換価値」の増殖

- 「単純な商品流通 —— 購買のための販売 —— は、流通の外にある究極目的、すなわち使用価値の取得、諸欲求の充足のための手段として役立つ。これに反して、資本としての貨幣の流通は自己目的である。というのは、価値の増殖は、この絶えず更新される運動の内部にのみ存在するからである。それだから、資本の運動には際限がない。」

【② pp. 264-265】 (p. 167)

■ 資本家の規定

○ 「この運動の意識的な担い手として、貨幣所有者は資本家になる。」【② p. 266】(p. 167)

○ 「…彼は資本家として、または人格化された ——意志と意識とを与えられた—— 資本として、機能するのである。」【② p. 266】(p. 168)

○ 資本家と貨幣蓄蔵者

「この絶対的な致富衝動、この熱情的な価値の追求は、資本家と貨幣蓄蔵者との共通であるが、しかし、貨幣蓄蔵者は愚かしい資本家でしかないのに、資本家は合理的な貨幣蓄蔵者である。価値の休みのない増殖 ——貨幣蓄蔵者は、貨幣を流通から救い出そうとすることによってこのことを追求するのであるが、より賢明な資本家は、貨幣を絶えず新たに流通にゆだねることによってこのことを達成する。」

【② pp. 266-267】(p. 168)

■ 資本の循環の重要な特質

「実際には、価値がここでは過程の主体になるのであって、この過程のなかで価値は、貨幣と商品との絶えず形態を変換しながらその大きさそのものを変え、原価値としての自己自身から剰余価値としての自己を押し出して、自己自身を増殖する。」

【② p. 268】(p. 169)

第二節 一般的定式の諸矛盾

■ 商品交換と剰余価値

○ 商品交換の法則：等価物どうしの交換

「…単純な商品流通において、ある使用価値が別の使用価値と取り替えられるということ以外には、商品の変態、商品の単なる形態変換しか起こらない。同じ価値、すなわち同じ分量の対象化された社会的労働が、同じ商品所有者の手のなかに、最初には彼の商品の姿態で、次にはこの商品が転化される貨幣の姿態で、最後にはこの貨幣が再転化される商品の姿態で、存在し続けている。この形態変換は価値の大きさの変化を少しも含まない。」

【② p. 275】(p. 172)

● 「商品交換は、その純粋な姿態においては、等価物どうしの交換であり、したがって価値を増やす手段ではない」

【② p. 276】(p. 173)

● 「もし交換価値の等しい商品どうしが、または交換価値の等しい商品と貨幣とが、したがって等価物どうしが交換されるならば、明らかにだれも、自分が流通に投じるよりも多くの価値を流通から引き出すことはしない。その場合には剰余価値の形成は行なわれない。」

【② pp. 278-279】(p. 174)

● 「ところが、商品の流通過程がその純粋な形態において前提とするのは、等価物どうしの交換である。」

【② p. 279】(p. 174)

■ 商品交換の法則の侵害の場合

○ 非等価物の交換の場合：価値以上に売る + 価値以下に買う

● 価値以上で売る

「売り手としては 10 だけ得をしたが、買い手としては 10 だけ損をする。」

【② pp. 279-280】 (p. 175)

● 価値以下で買う

「彼は、買い手として 10%もうけるまえに、すでに売り手として 10%の損をしていたのである。」

【② p. 280】 (p. 175)

⇒「すべてはやはりもとのままである。」

【② p. 280】 (p. 175)

「それゆえ、剰余価値の形成、したがってまた貨幣の資本への転化は、売り手たちが商品その価値よりも高く売ることによっても、また、買い手たちが消費をその価値よりも安く買うということによっても、説明されえないのである。」

【② pp. 280-281】 (p. 175)

★ 「等価物どうしが交換されても剰余価値は生じないし、非等価物どうしが交換されてもやはり剰余価値は生じない。流通または商品交換はなにも価値を創造しない。」

【② pp. 284-285】 (pp. 177-178)

■ 商業資本と高利貸資本の場合

「流通は価値を創造しない」のに、流通部面で活動する商業資本や高利貸資本は、もうけを引きだしている！？

○ 商業資本

● 「…等価物どうしが交換される限り、商業資本は成り立ちえないように思われるのであり、それゆえ、買う商品生産者と売る商品生産者とのあいだに商人が寄生的に割り込み、これらの商品生産者の両方からだまし取るということから、商業資本を導き出すほかないように思われる。」

【② p. 286】 (p. 178)

● 「商業資本の価値増殖を商品生産者にたいする単なる詐欺によって説明すべきでないとすれば、そのためには一連の長い中間項が必要なのであるが、商品流通とその簡単な諸契機とが唯一の前提となっているいまの場合には、それらの中間項はまだまったく欠けている。」

【② p. 286】 (p. 179)

○ 高利貸資本

● 「商業資本にあてはまることは、高利貸資本にはいっそうよくあてはまる。」

【② p. 286】 (p. 179)

● 「高利貸資本においては、形態 $G-W-G'$ が、無媒介の両極 $G-G'$ に、より多くの貨幣と交換される貨幣に、貨幣の本性と矛盾しており、したがってまた商品交換の立場からは説明しえない形態に、短縮されている。」

【② p. 287】 (p. 179)

⇒ 商業資本については『資本論』第3部 第4篇、高利貸資本については第5篇

■ 二重の結果

- 「すでに明らかにしたように、剰余価値は流通からは生じえないのであり、したがって、それが形成される場合には、流通そのもののなかでは目に見えないなにごとかが、流通の背後で起こっているに相違ない。」【② p. 288】(p. 179)
- 「したがって、資本は、流通から発生するわけにはいかないし、同じく、流通から発生しないわけにもいかない。資本は、流通のなかで発生しなければならないと同時に、流通のなかで発生してはならないのである。」【② p. 289】(p. 180)
- ① 「貨幣の資本への転化は、商品交換に内在する諸法則にもとづいて展開されるべきであり、したがって等価物どうしの交換が出発点をなす。」
- = 等価物交換の法則【② p. 289】(pp. 180-181)
- ② 「いまのところまだ資本家の幼虫として現存するにすぎないわが貨幣所有者は、商品とその価値どおりに買い、その価値どおりに売り、しかもなお過程の終わりには、彼が投げ入れたよりも多くの価値を引き出さなければならない。」
- 【② p. 289】(p. 181)

第三節 労働力の購買と販売

■ 剰余価値の源泉としての「商品」の発見

- 購買と販売ではないどの段階で価値の変化が起こるのか？
- 「というのは、等価物どうしが交換されるのであり、商品はその価値どおりに支払われるからである。したがって、この変化は、その商品の使用価値そのものから、すなわちその商品の消費から生じるしかない。ある商品の消費から価値を引き出すためには、わが貨幣所有者は、流通部面の内部で、すなわち市場において、ある商品——その使用価値そのものが価値の源泉であるという独自の性質をもっている商品を、したがってその現実的消費そのものが労働の対象化であり、それゆえ価値創造である商品を、発見する幸運にめぐまれなければならないだろう。そして、貨幣所有者は、市場でこのような独特な商品を——労働能力または労働力を、見いだすのである。」
- 【② p. 291】(p. 181)
- 労働力・労働能力とは？
- 「…人間の肉体、生きた人格のうちに存在していて、彼がなんらかの種類の使用価値を生産するそのたびごとに運動させる、肉体的および精神的諸能力の総体のことである。」
- 【② p. 292】(p. 181)

■ 貨幣所有者が商品としての労働力を市場で見出すための条件

○「商品交換は、それ自体、商品交換自身の本性から生じる依存関係以外には、いかなる依存関係も含んでいない。この前提のもとでは、商品としての労働力は、ただ、労働力がそれ自身の所有者によって、すなわちそれが自分の労働力である人によって、商品として売りに出されるかまたは売られる限りにおいてのみ、またそのゆえにのみ、市場に現われうる。」【② p. 292】(p. 182)

●「労働力の所有者が労働力を商品として売るためには、彼は、労働力を自由に処分することができなければならない、したがって自分の労働能力、自分の人格の自由な所有者でなければならない。」【② p. 292】(p. 182)

●「労働力の所有者と貨幣所有者とは、市場で出会って互いに対等な商品所有者として関係を結ぶ」

「両方とも法律上では平等な人格である」【② p. 292】(p. 182)

●「自分の労働力を、いつも自分の所有物、それゆえまた自分自身の商品として取り扱わなければならない」

「自分の所有権は放棄しない」【② p. 293】(p. 182)

●「…労働力の所有者が、自分の労働の対象化された商品売ることができなくて、むしろ自分の生きた肉体のうちにのみ存在する自分の労働力そのものを商品として売りに出さなければならない」【② p. 294】(p. 183)

■「自由」の二重の意味

○「したがって、貨幣を資本に転化させるためには、貨幣所有者は商品市場で自由な労働者を見いださなければならない。」【② p. 295】(p. 183)

●「自由な人格として自分の労働力を自分の商品として自由に処分するという意味」

●「売るべき他の商品をもっておらず、自分の労働力の実現のために必要ないっさいの物から解き放たれて自由であるという意味」【② p. 295】(p. 183)

■ 資本：社会的生産過程の一時代の告示

○「自然は、一方の側に貨幣または商品の所有者を、他方の側に単なる自分の労働力の所有者を、生み出しはしない。この関係は自然史的關係ではないし、また、歴史上のあらゆる時代に共通な社会的関係でもない。」【② p. 295】(p. 183)

● 商品

「商品になるためには、生産物は、生産者自身のための直接的な生活維持手段として生産されてはならない。」【② p. 296】(pp. 183-184)

「生産物量の圧倒的部分が直接に自家需要に向けられていて商品に転化していても、したがって社会的生産過程がその全体的な広さと深さの点でまだまだ交換価値に支配されているというにはほど遠くても、商品生産および商品流通は生じうる。」【② p. 296】(p. 184)

● 貨幣

「貨幣は商品交換の一定の発展程度を前提とする。貨幣の特殊な諸形態 —— 単なる商品等価物、または流通手段、または支払手段、蓄蔵貨幣、世界貨幣 —— は、いずれかの機能の作用範囲の違いと相対的優越とに応じて、社会的生産過程のきわめて異なる諸段階を示している。にもかかわらず、経験によれば、これらのすべての形態が形成されるためには、商品流通の比較的わずかな発達で十分である。」

【② p. 296】 (p. 184)

● 資本

「資本については事情は異なる。資本の歴史的な存在諸条件は、商品流通および貨幣流通とともにそこにあるというものでは決していない。資本は、生産諸手段および生活諸手段の所有者が、みずからの労働力の売り手としての自由な労働者を市場で見いだす場合にのみ成立するのであり、そして、この歴史的條件は一つの世界史を包摂する。だから、資本は、最初から社会的生産過程の一時代を告示する。」

【② p. 291】 (p. 184)

⇒ 世界史的展開については、第四分冊 第 24 章 いわゆる本源的蓄積

■ 労働力商品の価値規定

- 「他のすべての商品と同じく、労働力も一つの価値をもっている。この価値はどのようにして規定されるのか？」

【② p. 297】 (p. 184)

- 商品の価値 = その商品の生産または再生産に必要な労働の量によって決定
「労働力の商品は、他のどの商品の価値とも同じく、この独特な物品の生産に、したがってまた再生産に必要な労働時間によって規定されている。」

【② p. 297】 (pp. 184-185)

⇒ 「したがって、労働力の生産はこの生きた個人の生存を前提する」

【② p. 298】 (p. 185)

「労働力の生産とは、この個人自身の再生産または維持のことである。自分を維持するためには、生きた個人は、一定量の生活諸手段を必要とする。したがって、労働力の生産に必要な労働時間は、この生活諸手段の生産に必要な労働時間に帰着する。」

【② p. 298】 (p. 185)

■ 生活諸手段の総量の価値

- 「食物、衣服、暖房、住居などのような自然的欲求そのものは、一国の気候その他の自然の独自性に応じて異なる。」

【② p. 298】 (p. 185)

- 「…いわゆる必需欲求の範囲は、その充足の仕方と同様に、それ自身一つの歴史的産物であり、そのため、多くは一国の文化段階に依存するのであり、とりわけまた、本質的には、自由な労働者の階級がどのような条件のもとで、それゆえどのような慣習と生活要求とをもって形成されたか、に依存するのである。」

【② p. 298】 (p. 185)

⇒ 「労働力の価値規定は、他の商品の場合とは対照的に、歴史的かつ社会慣行的な一要素を含んでいる。」 【② p. 298】 (p. 185)

- 「労働力の所有者は死をまぬがれない。したがって、貨幣の資本への継続的転化が行われる前提として、市場における彼の出現が継続的現象であるためには労働力の売り手は『生殖によって、どの生きている個体も自己を永久化すると同じように』自己を永久化しなければならない。」

【② p. 299】 (pp. 185-186)

⇒ 「したがって、労働力の生産に必要な生活手段の総計は、補充人員すなわち労働者の子供たちの生活諸手段を含む」 【② p. 299】 (p. 186)

- 「一般的人間的な本性を変化させて、それが特定の労働部門における技能と熟練とに到達し、発達した独特な労働力になるようにするためには、特定の養成または教育が必要であり、それにはまたそれで、大なり小なりの額の商品等価物が費用としてかかる。」

【② p. 300】 (p. 186)

⇒ 「…労働力の生産のために支出される価値の範囲にはいっていく。」

【② p. 300】 (p. 186)

■ 労働力商品の消費過程

○ 「この貨幣所有者自身が交換で受け取る使用価値は、労働力の現実の使用、すなわちその消費過程においてはじめて現われる。」 【② p. 306】 (p. 189)

- 「労働力の消費過程は、同時に、商品の生産過程であり剰余価値の生産過程である。労働力の消費は、他のどの商品の消費とも同じく、市場すなわち流通部面の外で行われる。」

【② p. 306】 (p. 189)

⇒ 「…生産という秘められた場所に、“無用の者立ち入るべからず”と入口に掲示してあるその場所に、はいつていこう。ここでは、どのようにして資本が生産するかということだけでなく、どのようにして資本そのものが生産されるかということもまた、明らかになるであろう。貨殖の秘密がついに暴露されるに違いない。」

【② p. 306】 (p. 189)

第三篇 絶対的剰余価値の生産

第五章 労働過程と価値増殖過程

第一節 労働過程

剰余価値：その使用価値そのものが価値の源泉である労働力商品の消費過程からしか生まれない

■ 労働過程

- 「労働力の使用は労働そのものである。労働力の買い手は、その売り手を労働させることにより、労働力を消費する。」 【② p. 309】 (p. 192)

■ 労働過程における概念と規定：労働対象と労働手段

- 労働対象 【② pp. 311-312】 (p. 193)

- 「…人間の関与なしで、人間の労働の一般的対象として存在」：土地や水
- 天然に存在する労働諸対象
「労働が大地との直接的結びつきから引き離すだけのいっさいの物」：魚、木材、鉱石
- 人間の労働を媒介に変化している労働対象：原料
「労働対象がそれ自体すでにそれ以前の労働によっていわば濾過」

■ 労働手段

「労働者が自分と労働対象とのあいだにもち込んで、この対象にたいする彼の能動活動の導体として彼のために役立つ、一つの物または諸物の複合体」

【② p. 312】 (p. 194)

- 「労働諸手段は、人間労働力の発達の測定器であるばかりでなく、労働がそこにおいて行なわれる社会的諸関係の指標でもある。」 【② p. 313】 (p. 195)
- 役割による分類
筋骨系統：「機械的労働諸手段」と 脈管系統：「管、桶、籠、壺」
- 労働過程が行なわれるために必要な空間：土地、作業用建物、運河、道路

■ 生産手段

- 「全過程を、その結果の、すなわち生産物の立場から考察すれば、労働手段と労働対象の両者は生産手段として、労働そのものは生産的労働として現われる。」

【② pp. 315-316】 (p. 196)

- 「…諸生産物は、それらが生産諸手段として新たな労働過程にはいり込むことによって、生産物という性格を失う。それらは、いまではもう生きた労働の対象的要因として機能するだけである。」 【② p. 318】 (p. 197)

= 紡績における生産手段としての紡績材料や紡錘（過去の労働生産物）

⇒ 「…それらの生産物の労働過程への投入、したがって生きた労働との

接触は、こうした過去の労働のこれら諸生産物を使用価値として維持し実現するための唯一の手段なのである。」【② p. 320】(p. 198)

- 「労働は、その素材的諸要素、その対象およびその手段を消費し、それらを食い尽くすのであり、したがって消費過程である。この生産的消費が個人的消費と区別される点は、後者は諸生産物を生きた個人の生活諸手段として消費し、前者はそれらを労働の生活諸手段、すなわち生きた個人の活動する労働力の生活諸手段として消費する、ということである。」【② p. 320】(p. 198)

■ 2つの独自の現象

- 「労働者は、自分の労働が所属する資本家の管理のもとで労働する。」【② p. 322】(p. 199)
- 「…生産物は資本家の所有物であって、直接的生産者である労働者の所有物ではない。」【② p. 322】(p. 200)

第2節 価値増殖過程

■ 剰余価値が生まれる仕組み

- 「そこで、こんどはわれわれは、生産過程を価値形成過程として考察することにしよう」【② p. 325】(p. 201)
- ⇒ 「商品そのものが使用価値と価値との統一であるのと同様に、商品の生産過程は労働過程と価値形成過程との統一でなければならない。」【② p. 325】(p. 201)

○ 糸製造（綿花から糸）の例【② pp. 325-332】(pp. 201-205)

- ・ 労働力の価値＝3000 円＝6 時間労働＝労働力の再生産費用
- ・ 原料：綿花 10kg＝1 万円 + 労働手段：紡錘＝2000 円 = 計 1 万 2000 円
- ★ 3000 円 + 1 万 2000 円 = 1 万 5000 円 = 前貸し資本
- ・ 1 労働時間＝1・2/3 kg の綿花 → 1・2/3 kg の糸に転化
- ⇒ 6 時間：10kg の綿花で、10kg の糸（1・2/3 kg×6 時間）
- ・ 糸 = $\underbrace{\text{綿花} + \text{紡績}} + \underbrace{\text{糸製造過程}} \text{ (労働力)}$

$$1 \text{ 万円} + 2000 \text{ 円} + 3000 \text{ 円} = 1 \text{ 万 } 5000 \text{ 円} = \text{糸 } 10\text{kg}$$

$$\star \text{ 糸 } 10\text{kg} = 1 \text{ 万 } 5000 \text{ 円} = \text{糸の価値}$$

$$\blacksquare \text{ 前貸し資本} = \text{糸の価値} = 1 \text{ 万 } 5000 \text{ 円} : \text{価値の増殖はない}$$

- ★ 「わが資本家は愕然とする。生産物の価値は、前貸しされた資本の価値と同じなのである。前貸しされた価値は増殖せず、なんらの剰余価値も生まなかったのであり、したがって貨幣は資本に転化しなかった。」【② p. 331】(p. 205)

- 「労働者を二四時間のあいだ生かしておくために半労働日が必要だということは、労働者がまる一日労働することを決してさまたげはしない。」【② p. 336】(p. 208)

■ 6 労働時間から 12 労働時間への延長

「…労働者は、作業場において、六時間だけでなく、一二時間の労働過程に必要な生産諸手段を見いだす。一〇重量ポンドの綿花が六労働時間を吸収して一〇重量ポンドの糸に転化したのであれば、二〇重量ポンドの綿花が一二労働時間を吸収して二〇重量ポンドの糸に転化するであろう。」 【② p. 337】(p. 208)

$$\begin{array}{ccccccc} \text{糸} = & \underbrace{20\text{kg 綿花} + \text{紡錘}}_{\text{生産手段}} & + & \underbrace{\text{糸製造過程 (労働力)}}_{\text{紡績労賃}} & & & \\ & 2 \text{ 万円} + 4000 \text{ 円} & + & 3000 \text{ 円} & = & 2 \text{ 万 } 7000 \text{ 円} & = \text{糸 } 20\text{g} \end{array}$$

★ 糸 20kg = 3 万円

■ 前貸し資本：生産手段（2 万 4000 円）＋賃金（3000 円）＝2 万 7000 円
糸の価値 = 3 万円 ⇒ 3000 円価値増殖 = 貨幣の資本への転化

★ 「こうして二七シリングは三〇シリングに転化した。それは、三シリングの剰余価値を生んだ。手品はついに成功した。貨幣は資本に転化した。」

【② p. 338】(p. 209)

第三篇 絶対的剰余価値の生産

第六章 不変資本と可変資本

ポイント：労働過程の諸要因が生産物価値の形成においてさまざまな役割を果たす

⇒ 資本の価値増殖過程における資本のさまざまな構成諸部分の諸機能の特徴を明らかにする

■ 生産的労働における「労働の二重性」

○ 労働の二面性

● 労働過程：労働者は「労働対象に新たな価値をつけ加える」＋「生産諸手段の価値は、それが生産物に移転する」

⇒ 「労働者は同じ時間内に二重に労働するのではない。」

「労働対象にたいする新価値のつけ加えと生産物における旧価値の維持とは、労働者が同じ時間内に一度しか労働しないのにその同じ時間内に生み出す二つのまったく異なる結果なのであるから、結果のこの二面性は、明らかに彼の労働そのものの二面性からのみ説明されうる。」 【② p. 347】(p. 214)

● 「したがって精紡工の労働は、その抽象的一般的属性においては、すなわち人間的労働力の支出としては、綿花と紡錘との価値に新価値をつけ加え、紡績過程と

してのその具体的、特殊的、有用的属性においては、これらの生産手段の価値を生産物に移転し、こうしてそれらの価値を生産物において維持するのである。そこから、同じ時点における労働の結果の二面性が生じる。」

【② p. 349】(p. 215)

■ 生産手段の価値の移動

- 「生産手段は、それが生産手段として失う価値だけを生産物に引き渡す。しかし、この点では、労働過程の対象的諸要因によってそれぞれ事情は異なる。」

【② p. 352】(p. 217)

- 労働対象：補助材料（石炭、潤滑油、染料 etc.）と原料

「原料と補助材料は、それらが使用価値として労働過程にはいり込んだときの自立的な姿態を失う。」

【② p. 353】(pp. 217-218)

- 労働諸手段：用具、機械、工場建物、容器 etc.

「最初の姿態を保持し、きのうとまったく同じ形態であすもふたたび労働過程にはいり込む限りにおいてのみ、労働過程で役に立つ。それらは、その存命中に、すなわち労働過程中に生産物にたいしてその自立的な姿態を保持するが、その死後にもやはりそうする。機械、道具、作用業建物などの遺骸は、それらの助けでつくられた諸生産物とは依然として別個に存在する。…（中略）…その使用価値は労働によって完全に消費し尽くされ、こうしてその交換価値は完全に生産物に移行したのである。」

【② p. 353】(p. 218)

- 生産手段の使用価値の喪失とそれに対応する価値の引き渡し

「生産手段は、それが労働過程においてそれ自身の使用価値の破壊によって失う価値よりも多くの価値を生産物に引き渡すことは決してない」【② p. 354】(p. 218)

- 労働過程と価値増殖過程との区別

「機械の価値の一〇〇〇分の一が、日々、機械そのものからその日々の生産物に移行する。同時に、生命力がしだいに失われるとはいえ、機械総体は労働過程において不断に作用し続ける。したがって、労働過程の一要因である。ある生産手段は、労働過程へは全体としてはいり込むが、価値増殖過程へは部分的にしかはいり込まない」

【② p. 354】(p. 219)

「他方では、その反対に、ある生産手段は、部分的にしか労働過程にはいり込まないにもかかわらず、価値増殖過程には全体としてはいり込むことがありうる。綿花を紡いで糸にするさいに、毎日一五重量ポンドにつき一五重量ポンドが屑になって糸にはならず、“デビルダスト”にしかならないと仮定しよう。…（中略）…糸の要素をなんら形成しないこの一五重量ポンドの綿花の価値は、糸の実体を形成する一〇〇重量ポンドの綿花の価値とまったく同様に、糸価値のなかに入り込む。一五重量ポンドの綿花の使用価値は、一〇〇重量ポンドの糸をつくるために塵にならざるをえない。」

【② p. 356】(pp. 219-220)

■ 生きた労働の天性

- 「価値をつけ加えることによって価値を維持するということは、活動している労働力すなわち生きた労働の天性である。この天性は、労働者にはなんの費用もかからないが、資本家には現存の資本価値の維持という多大の利益をもたらす。景気がよいあいだは、資本家は金儲けに没頭しきっていて、労働のこの無償の贈り物には気がつかない。労働過程の強力的中断すなわち恐慌は、彼にこのことを痛切に感じさせる。」

【② p 359】 (p. 221)

⇒ 「天候と腐朽の自然法則とは、蒸気機関が回転をやめるからといってその作用を停止しはしない」

【② 注 23 p. 360】 (p. 221)

■ 資本の2つの概念：不変資本と可変資本

「生産物の総価値のうち、その形成諸要素の価値総額を超える超過分は、価値増殖した資本が最初に前貸しされた資本価値を超える超過分である。一方における生産諸手段と他方における労働力とは、最初の資本価値がその貨幣形態を脱ぎ捨てて労働過程の諸要因に転化するさいにとった異なる存在諸形態にすぎない。」

【② pp, 362-363】 (p. 223)

■ 2つの資本分類

○ 不変資本

「… 資本のうち、生産諸手段すなわち原料、補助材料、および労働手段に転換される部分は、生産過程でその価値の大きさを変えない。だから私は、これを不変資本部分、または簡単に不変資本と名づける。」

【② p. 363】 (p. 223)

○ 可変資本

「これにたいして、資本のうち、労働力に転換される部分は、生産過程でその価値〔の大きさ〕を変える。この部分は、それ自身の等価物と、これを超えるある超過分である剰余価値とを再生産するのであり、この剰余価値はそれ自身変動しうるのであって、より大きいこともより小さいこともありうる。資本のこの部分は、一つの不変量から絶えず一つの可変量に転化する。だから私は、これを可変資本部分、または簡単に可変資本と名づける。」

【② p. 363】 (p. 224)

○ 概念を表わす記号

● 資本=C

● 不変資本=c (constante) ● 可変資本=v (variabel) ● 剰余価値=m (Mehrwert)

★ 生産物価値=c + v + m

第7章 剰余価値率

第1節 労働力の搾取度

■ 剰余価値率

- 「前貸資本 C が生産過程で生み出した剰余価値、すなわち前貸資本価値 C の増殖分は、まずもって、生産物の価値のうち、その生産諸要素の価値総額を超える超過分として現われる。」 【② p. 366】(p. 226)

- $C = c + v \rightarrow$ 例：前貸資本 £ 500 = £ 410 (c) + £ 90 (v)

$\Rightarrow$ 生産過程 $\Rightarrow C' = (c + v) + m$

$$£ 410 (c) + £ 90 (v) + £ 90 (m) = £ 590$$

- $c = £ 410 =$ 原料 £ 312 + 補助材料 £ 44 + 機械設備の摩滅 £ 54

- 「…C は C' に転化する。既述のように、不変資本の価値は生産物において再現するにすぎない。したがって、過程において現実新たに生み出された価値生産物は、過程から得られた生産物価値とは異なるのであって、それゆえ、一見そう見えるように、 $(c + v) + m$ すなわち (四一〇ポンド (c) + 九〇ポンド (v)) + 九〇ポンド (m) ではなく、 $v + m$ すなわち (九〇ポンド (v) + 九〇ポンド (m)) なのであり、五九〇ポンドではなく、一八〇ポンドなのである。」 【② p. 368】(p. 227)

- 「剰余価値は、v すなわち労働力に転換された資本部分に生じる価値変化の結果であるにすぎず、したがって $v + m = v + \Delta v$ (v プラス v の増加分) である。」 【② p. 369】(p. 228)

$\Rightarrow$ 注意点

- ① 「…現実の価値変化と価値が変化する割合とは、前貸総資本の可変的構成部分が増大するために前貸総資本もまた増大するということによってあいまいにされる。」

$\rightarrow$ 「過程を純粹に分析するためには、生産物価値のうち普遍的資本価値が再現するにすぎない部分を完全に捨象すること、すなわち、不変資本 $c=0$ とすることが必要」

【② p. 369】(p. 228)

- ② 「九〇ポンドは一つの与えられた、したがって不変の大きさであり、それゆえこれを可変の大きさとして扱うことは不合理であるように見える。」

$\rightarrow$ 「労働力の購入に前貸された資本部分は、一定分量の対象化された労働であり、したがって、購買された労働力の価値と同様に不変の大きさの価値である。しかし、生産過程そのものにおいては、前貸された £ 90 に代わって活動する労働力が、死んだ労働に代わって生きた労働が、静止している大きさに代わって流動している大きさが、不変の大きさに代わって可変の大きさが、登場する。その結果が、v の再生産プラス v の増加分である。」 【② pp. 369-370】(p. 228)

⇒ 「もちろん、剰余価値の割合については、直接に剰余価値を生み出し、剰余価値によってその価値変化が表わされる資本部分にたいする割合だけでなく、前貸総資本にたいする割合も、大きな経済的意義をもっている。そこで、われわれはこの割合を第三部で詳しく扱う〔第三巻、第一篇、第二章「利潤率」、参照〕。」 【② p. 370】 (p. 229)

★ 「そこで、われわれは、さしあたり不変資本部分をゼロに等しいとする。」 【② p. 371】 (p. 229)

○ 可変資本価値が価値増殖した割合： $m/v \Rightarrow 90/90 = 100\%$

⇒ 「可変資本のこの価値増殖のこの割合または剰余価値の比率的大きさを、私は剰余価値率と名づける。」 【② p. 372】 (p. 230)

■ 2つの労働時間：必要労働時間と剰余労働時間

○ 必要労働・必要労働時間

「…、労働日のうち労働者が労働力の日価値、たとえば三シリングを生産する部分においては、彼は、ただ資本家によってすでに支払われた労働力の価値の等価分を生産するだけであるから、したがって新たに創造された価値によって前貸可変資本価値を補填するだけであるから、価値のこの生産は単なる再生産として現われる。だから私は、労働日のうち、この再生産が行なわれる部分を必要労働時間と名づけ、この時間中に支出される労働を必要労働と名づける。」 【② p. 373】 (pp. 230-231)

■ 剰余労働・剰余労働時間

「労働者が必要労働の限界を超えて苦勞して働く労働過程の第二の期間は、確かに労働者に労働を費やさせる、すなわち労働力を支出させるのであるが、しかし彼のためにはなんらの価値も形成しない。それは、無からなにかを創り出すという魅力をいっぱいたたえながら資本家を魅惑する剰余価値を形成する。私は、労働日のこの部分を剰余労働時間と名づけ、この時間中に支出される労働を剰余労働 (surplus labour) と名づける。」 【② pp. 373-374】 (p. 231)

■ 搾取度＝剰余価値率

○ 「可変資本の価値は、この資本によって購買された労働力の価値に等しいのであるから、また、この労働力の価値は労働日の必要部分を規定するが、剰余価値のほうは労働日の超過部分によって規定されるのであるから、次のような結果が生じる——剰余価値の可変資本にたいする比は、剰余労働の必要労働にたいする比と等しい。すなわち、剰余価値率 $m/v = \text{剰余労働} / \text{必要労働}$ である。」

【② p. 375】 (pp. 231-232)

「…剰余価値率は、資本による労働力の、または資本家による労働者の搾取度の正確な表現である。」 【② p. 375】 (p. 232)

■ 紡績工場の例【pp. 377-378】(p. 233)

不変資本

綿花 1 万 600 重量ポンド	£ 342			
前紡機+蒸気機関	£ 20			
工場賃借料	£ 6			
補助材料 石炭	£ 4・1/2	£ 10	£ 378	£ 430
ガス	£ 1			
油	£ 4・1/2			
可変資本				
労賃	£ 52			

糸価値 £ 510 ポンド

剰余価値 £ 510 - £ 430 = £ 80

剰余価値率 £ 80 / £ 52 = 153・11 / 13%

v + m £ 52 + £ 80 = £ 132

平均労働日 (10 時間) 52 / 132 : 80 / 132 = 10 時間

必要労働時間 : 3・31 / 33 時間 剰余労働時間 : 6・2 / 33 時間

第 2 節 生産物の比率的諸部分での生産物価値の表現

「資本家がどのようにして貨幣を資本にするのかを示した例に立ち戻ろう」

【② p. 380】(p. 234)

■ 労働時間の構成諸部分で表現した生産物価値

○ 精紡工の必要労働時間 : 6 時間 剰余労働時間 : 6 時間 搾取度 : 100%

「彼が雇う精紡工の必要労働時間は六時間、剰余労働も同じく六時間、したがって労働力の搾取度は一〇〇%であった。」

【② p. 380】(p. 234)

⇒ 12 時間の生産物 = 糸 : 20kg → 30 円

糸の生産物価値 = c + v + m

30 円の糸価値 = 24 円 (c) (= 綿花 20 円 + 紡錘 4 円) + 3 円 (v) + 3 円 (m)

不変資本 (c) : 20kg の糸 c = 24 円 / 30 円 = 8 / 10 ⇒ 20kg のうち 16kg の糸中に存在

● 16kg (c) の糸のうち

綿花 : 20 円 / 24 円 = 5 / 6 → 16kg × 5 / 6 = 13・1 / 3kg

紡錘など : 16kg - 13・1 / 3kg = 2・2 / 3kg

⇒ 「一六重量ポンドの糸は、綿花、紡錘、石炭などの変装したものにはすぎない」

【② p. 382】(p. 236)

- 「四重量ポンドの糸は、いまや、一二時間の紡績過程で生産された六シリングの新価値以外のものはなにも表さない」 【② p. 382】(p. 236)

$$\Rightarrow 4\text{kg (v + m) のうち、必要労働} = 2\text{kg} + \text{剰余労働} = 2\text{kg}$$

$$6 \text{ 円} \qquad \qquad \qquad 3 \text{ 円} \qquad \qquad \qquad 3 \text{ 円}$$

第3節 シーニアの「最後の1時間」説

■ ナッソー・W・シーニア

「工場主たちは、近ごろ公布された工場法〔1833年の工場法〕と、それを乗り越えてさらに進もうとしている一〇時間運動とに対抗する、懸賞試合の闘士として彼を選んだのである。」 【② p. 385】(p. 238)

○ 工場主の常用の計算方法

「…わが精紡工は、たとえば彼の労働日の最初の八時間には綿花の価値を、次の一時間三六分には消耗された労働諸手段の価値を、次の一時間一二分には労賃の価値を生産または補填し、そしてかの有名な『最後の一時間』だけを工場主に、すなわち剰余価値の生産にささげる、と。」

⇒ 「生産物の諸部分が完成してならべられている空間から、それらが相次いでたどる時間に翻訳したものにはすぎない」

「実践的には価値増殖過程に利害関係をもつとともに、理論的にはこの過程を誤解することに関心をもつ人々の頭脳にあっては、ことにそうである」

【② p. 384】(p. 237)

○ シーニアによる生産物の構成の労働時間での読み替え表式

糸の価値 30 シリング = 24 シリング (c) + 3 シリング (v) + 3 シリング (m)

12 時間労働日 = 9 時間 $\frac{3}{5}$ (c) + 1 時間 $\frac{1}{5}$ (v) + 1 時間 $\frac{1}{5}$ (m)

「… 労働者は最後から二番目の一時間で自分の労賃を生産し、最後の一時間で諸君の剰余価値または純利得を生産する。」 【② p. 389】(p. 239)

⇒ 価値移転と価値形成とが労働の二重性によって同時に行われていることを無視した議論

★ 労働時間の短縮＝資本家の利得が消滅してしまう、との考え

⇒ 労働時間短縮（10 時間運動）に抵抗するための論理

第4節 剰余生産物

■ 剰余生産物

○ 「生産物のうち剰余価値を表わしている部分（第二節の例では二〇重量ポンドの糸の $\frac{1}{10}$ すなわち二重量ポンドの糸）を、われわれは、剰余生産物（surplus produce, produit net〔フランス語で「純生産物」〕と名づける。」

【② p. 395】(p. 243)

- 「剰余価値率が、資本の総額に対する剰余価値の比率によってではなく、資本の可變的構成部分にたいする剰余価値の比率によって規定されるのと同じように、剰余生産物の高さも、総生産物の残部にたいする剰余生産物の比率によってではなく、必要労働を表わしている生産物部分にたいする剰余生産物の比率によって規定される。」 【② p. 395】 (p. 243)

第3篇 絶対的剰余価値の生産

第8章 労働日

労働日：「必要労働と剰余労働との合計、すなわち労働者が彼の労働力の補填価値を生産する時間と剰余価値を生産する時間との合計は、彼の労働時間の絶対的大きさ——労働日 (working day) を形成する。」 【② p. 397】 (p. 244)

第1節 労働日の諸限界

- 定量部分と可變部分 【② pp. 398-399】 (pp. 245-246)
 - 必要労働時間 ab : 6 時間の場合

労働日Ⅰ : bc=1 時間	a		b		c	 7 時間
労働日Ⅱ : bc=3 時間	a		b		c	 9 時間
労働日Ⅲ : bc=6 時間	a		b		c	...12 時間
 - 必要労働時間 ab : 定量 剰余労働時間 bc : 可變量

- 剰余労働時間 bc の必要労働時間 ab の比率 (bc/ab)

労働日Ⅰ : $1/6 = 16 \cdot 2/3\%$

労働日Ⅱ : $3/6 = 50\%$

労働日Ⅲ : $6/6 = 100\%$

- 剰余労働時間 / 必要労働時間 = 剰余価値率

- 剰余価値率は労働日の大きさは示さない 【② p. 399】 (p. 246)

「たとえばそれが一〇〇%であるとしても」「それは、労働日の二つの構成部分、すなわち必要労働と剰余労働とが等しい大きさであることを示すであろうが、この部分のそれぞれがどのような大きさであるかを示しはしないであろう。」

⇒ 「労働日は不変量ではなく可變量である。」

「…その全体の大きさは、剰余労働の長さまたは継続とともに變動する。」

- 労働日の2つの制限：最小限度と最大限度の制限

- 最小限度の制限

「確かに、延長線 bc、すなわち剰余労働をゼロとすれば、一つの最小限度、すなわち労働者が自己を維持するために一日のうちどうしても労働しなければならない部分が残る。しかし、資本主義的生産様式の基礎においては、必要労働はつねに彼の労働日の一部分になるうだけであり、したがって労働日がこの最小限度にまで短縮されることは決してありえない。」

【② p. 400】(p. 246)

⇒ 資本主義的生産：価値増殖（剰余価値生産）を通じて貨幣は資本へ転化し、「休みのない運動のみが資本家の直接的目的」

【② p. 266】(p. 168)

＝「剰余価値の生産が資本主義的生産の規定的目的」

【② pp. 395-396】(p. 243)

■ 最大限度の制限：二重の規定

○ 労働力の肉体的な制限：肉体的な諸欲求（食事、睡眠、休息、入浴、着替え etc.）

○ 社会慣行的な制限：知的・社会的な諸欲求 ＝ 一般的文化水準によって規定

⇒ 「…労働日の変化は、肉体的および社会的な諸制限の範囲内で行なわれる。しかし、この二つの制限はきわめて弾力性に富むものであって、変動の余地はきわめて大きい。こうして、八、一〇、一二、一四、一六、一八時間からなる労働日、したがってきわめて相違なる長さの労働日が存在するのである。」

【② pp.400-401】(p. 247)

■ 「一労働日とはなにか？」「相違なる長さの労働日が存在」

【② p. 401】(p. 247)

○ 「自然の一生活日より短い。」

○ 「資本家としては、彼はただ人格化された資本にすぎない。彼の魂は資本の魂である。ところが、資本は唯一の生活本能を、すなわち自己を増殖し、剰余価値を創造し、その不変部分である生産諸手段で、できる限り大きな量の剰余労働を吸収しようとする本能を、もっている。」

【② p. 401】(p. 247)

「資本とは、生きた労働を吸収することによってのみ吸血鬼のように活気づき、しかもそれをより多く吸収すればするほどますます活気づく、死んだ労働である。」

【② p. 401】(p. 247)

■ 商品交換の法則

○ 「…資本家は商品交換の法則を楯に取る。彼は、他のすべての買い手と同じように、彼の商品の使用価値からできる限り大きな効用を手に入れようとする。」

【② p. 402】(p. 247)

○ 「僕が君に売った商品は、その使用が価値を創造し、しかもそれ自身が値するよりも大きな価値を創造するという点で、他のありきたりの商品とは区別される。これこそ君がこの商品を買う理由であった。」

【② p. 402】(p. 248)

⇒ 「資本の増殖として現われるもの」＝ 「労働力の余分な支出」

■ 労働日の無制限の延長に対する闘争宣言

○ 標準労働日の要求

【② p. 403-404】(pp. 248-249)

- 「僕は毎日、労働力の正常な持続と健全な発達とに合致する限りでのみ労働力を流動させ、運動に、すなわち労働に転換しよう。労働日を無制限に延長することによって、君は、一日のうちに、私が三日間かかって補填できるよりも多くの量の僕の労働力を流動させることができる。こうして君が労働において得るものを、僕は労働実体において失うのである。」

- 「僕は標準労働日を要求する。」 【② p. 405】 (p. 249)

■ 同等な権利対権利

○ 資本家の権利

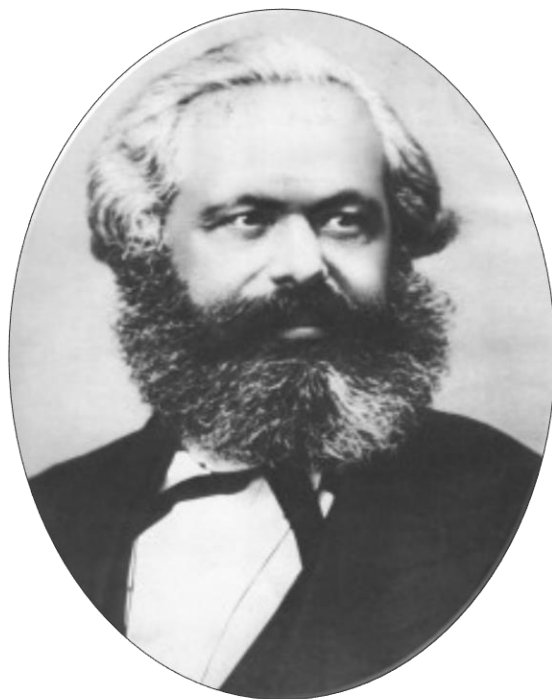
「資本家が労働日をできる限り延長し、できることなら一労働日を二労働日にしようとする場合には、彼は、買い手としての彼の権利を主張する。」

【② p. 405】 (p. 249)

○ 労働者の権利

「…売られた商品の独特な本性は、買い手がこの商品を消費することへのある制限を含んでいるのであって、労働者が、労働日を一定の標準的な大きさに制限しようとする場合には、彼は売り手としての彼の権利を主張する。」【② p. 405】 (p. 249)

- ★ 「…どちらも等しく商品交換の法則によって確認された権利対権利という一つの二律背反が生じる。同等な権利と権利とのあいだでは強力がことを決する。こうして、資本主義的生産の歴史においては、労働日の標準化は、労働日の諸制限をめぐる闘争——総資本家すなわち資本家階級と、総労働者すなわち労働者階級とのあいだの一闘争——として現われる。」 【② p. 405】 (p. 249)



『資本論』 第二巻講義②
第一巻ダイジェスト 2 / 3